

平成30年1月11日（木）

第三学期始業式 式辞

秋田県立本荘高等学校 校長 今井 智幸

多感な青春기에、視野や人間力を主体的に広げ深める勇氣を

青年期には毎日の生活の中で、ふと自分が生きていること自体が不思議に思えたり、自分はなぜ、何のために、今、ここに存在しているのだろうか、といった人生への疑問に目覚めることがあります。また、自らの責任において生きていく孤独な自己に覚醒することもあります。それは、人間という存在や生の一回性に関わる気づきへの始まりです。人が孤独を感じるのは、精神的に親から離れ、一人の自立した人間として歩き始めようとする証です。人は誰でも、この世でかけがえのない、個性を持つただ一人の自分を生きています。だから、誰でも本質的には孤独な面を持ち、孤独の中で自分を見つめ、自分と対話しながら成長していきます。それは、「新しい自己」を発見し直そうとする営みであり、「真の主体」となるきっかけとなり得ます。

ドイツの文豪ゲーテ（1749～1832）は、『ファウスト』の中で、「人間は努力しているうちは、迷うものだ」と言います。つまり、悩みというのは、現実の人生にぶつかり、自分の生き方や在り方を、真摯に模索するからこそ発生するものだということです。たとえ、人生の壁にぶつかって自分の無力さに絶望することがあったとしても、それは過去の自分を乗り越え、「新しい自己」を確立するための生みの苦しみと言えます。

また、青春期は、社会の束縛や息苦しさから逃れ、自由を求める欲求が高まる時期です。社会心理学者フロム（1900～80）は、自由には束縛からの解放を求める「～からの自由」（freedom from something）と、目標の実現へと向かって努力する「～への自由」（freedom to something）とを分けています。目標の実現のために努力する「～への自由」というのは、うまくいかず誰かのせいにして不満をぶつかけたり、現実から逃避したりすることではなく、自分なりの人生の目標や価値の実現に向かって努力する「創造的な自由」のことです。自分らしい価値のある人生を創造するという、もう一つの自由とも言えます。

ところで、アメリカの絵本作家エリック・カールの児童書に『はらぺこあおむし』という世界的ベストセラーがあります。生徒の皆さんの中にも、幼い頃よく親しみよく知っているという人がいるかもしれません。葉っぱの上の卵が青虫となり、小さかった青虫が大きくなってさなぎとなり、最後は美しい蝶になる過程が、色彩豊かに描かれています。食べ物には小さな穴があいていて、子どもが指を使って遊べる工夫もされています。幼い子どもでもページをめくるうちに、時間の流れ、夜と昼、曜日の感覚、1・2・3・4・5という数、そして食べるということの重要性、更には、物事は変化し、人は変わっていくということが、自然と頭に入ってくるようなつくりがなされています。

『はらぺこあおむし』のさなぎは、長らく高校生に携わってきた私には、高校生という青春期を暗示しているように思われます。さなぎは「じっと丸まっているだけ」。しかし、堅い殻に覆われたさなぎの時期は、何もしていない時間ではなく、自然界でたくましく生き抜く美しい蝶となるために、じっと力を蓄え、自立の準備をしている時期です。一度しかない人生を後悔しないように生きるために、失敗や挫折を重ねても、自分らしい人生を創り出す力を蓄え、自立に向けた準備をしている時期、それが青春期です。自我に目覚め、感受性が敏感になり、不安や孤独といった様々な思いにとらわれてしまう。しかし、これまでの殻を破って、未来をよりよく生きるために、人間、社会、時代や自然等への視野や興味・関心を広げ、深めてくれる「第二の誕生」、それが青春期です。多感な青春期に、立ちすくむことなく、視野や人間力を主体的に広げ深める勇気、自ら学び続ける力を、ぜひ大切にしたいと思えます。人は、学びながら前に進むものです。

結びに、卒業を間近に控えている受験生の皆さんが、生徒会活動、勉強、部活動等、これまで本校で体験し、身に付けた様々な学びを発揮し、一人ひとりが未来を拓いて巣立っていくことを祈っています。それは、1、2年生の後輩にとっても、大きな励みと勇気、そして希望となるものです。自己の可能性を信じ、最後まで冷静に、悔いなくやり切ることを祈っています。